

山作品を初めてブロンズ化した 鑄金美術家

山本 安曇 (やまもと あずみ) 穂高 立足出身

〈安曇が活躍した時代〉 1885 (明治 18) 年～1945 (昭和 20) 年 享年 60 歳

明治						大正	昭和					
18	39	40	42	43	45	2	2	7	11	19	20	
生まれる。本名は菊一。	穂高立足に山本初太郎の四男として	校、農業補習科で教鞭をとる。	東穂高ほか三か村組合立穂高高等学校、	東穂高ほか三か村組合立穂高高等学校を受け、東京美術学校鑄造科に入学。	研成義塾に入り、井口喜源治の薫陶を受け、東京美術学校鑄造科に入学。	北條虎吉氏肖像」を鑄造。	荻原碌山との親交がはじまる。	碌山の死後、未だだった「女」灰皿を完成させ、鑄造。	東京美術学校鑄造科を卒業。	東京駒込で制作活動に入る。	郷里の林ますると結婚。	三月四日、東京駒込の自宅前にて空襲で亡くなる。

安曇と碌山はどんな関係？

安曇がまだ東京美術学校の学生だったときに二人の交流は始まりました。「北條虎吉氏肖像」は学生だったときの安曇が初めてブロンズ化した碌山作品です。翌年に鑄造した「女」も含め、文展では3等賞という成績をおさめました。碌山が芸術家として大成した裏には安曇の尽力があったことがわかります。

この当時、ブロンズ化は一般的な技術ではありませんでした。パリから帰った碌山が、帰国後にブロンズで展覧会に出品したいと考え、当時の技術転換期にあつて、美術鑄造ができる条件の満たしていた東京美術学校の学生、かつ、同郷であつた安曇に近づいて行つたのではないかと考えられています。



【安曇の美術作品】



↑「女」



↓初入選の「三光」

北野進著「安曇と碌山」より転載



東京国立近代美術館蔵 碌山の台座の銘

「碌山作 安曇鑄」の刻銘

安曇は鑄造技術によって、碌山の芸術に尽力しました。しかし、碌山美術館では安曇の名が見られません。安曇が碌山の「女」の石膏に「碌山作 安曇鑄」と刻銘してしまい、これを期に安曇の評価が変わってしまったからです。安曇はなぜ、刻銘を行つたのでしょうか。

ちなみに、碌山のブロンズ作品が全て安曇鑄というわけでもありません。「女」は東京国立近代美術館をはじめ、碌山美術館や東京芸術大学などにある9体です。その他の「女」は安曇が鑄造したものではなく、安曇が鑄造したものかどうかは台座の文字が教えてくれています。

碌山作品の鑄造以外にも、自身の作品を多く残しています。第8回帝展において初の入選を果たすと、その後は連続入選。やがては推薦、無鑑査、審査員と実績を積んでいきます。安曇はそれだけ優れた芸術家でした。